研究テーマ：地域総合研究の一環としての竹原・吉井家資料の調査および基礎的研究	
研究代表者（職氏名）：人間文化学部教授　西本寮子	連絡先 （E-mail 等）：nisimoto@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者（職氏名）：広島県立文書館主任研究員　西村晃・同 副主任研究員　西向宏介 人間文化学部教授　樹下文隆・同 教授　菅原範夫	

1　研究の目的

本研究は、広島県立文書館からの提案を受けて、平成 18 年度から３年計画で取り組んでいる竹原・吉井家に伝わる文芸資料の調査・研究であり、19 年度はその２年目にあたる。18 年度中に慳貪 36 箱のうち 27 箱について基礎データの収集を終え、仮目録を作成し、その一部を文書館および所蔵者に提供している。２年目にあたる 19 年度は、最終目標の実現にむけて継続して資料の調査を実施するとともに、関連する先行研究にかかる情報の収集を行った。最終年度には、文芸関係資料目録の作成の完成を目指すとともに、かつて塩田経営で栄えたことによる豊かな経済力を背景として隆盛を極めた竹原の人々の文芸活動の一端を明らかにすることを目標としている。

新たに確認された資料の一部

19 年度の具体的な調査対象は未調査の慳貪９箱と、18 年度の書物調査の過程で伝存が確認された、書冊の形態を取らない文芸資料群、すなわち詠草を記した短冊、懐紙類と関連する記録類と講義録の類、および 18 年度末に文書館に追加収蔵された資料群の調査である。

2　研究の背景

吉井家は竹原市下市にある町並み保存に面している。広島藩の学芸の中心を担った頼家とも近く、かつて竹原が塩田経営で栄えていたころ、代々の当主らが、質の高い教育を受け、竹原文芸の中心的存在として活躍し、多くの事跡を残したであろうことをしのばせる。文芸に造詣の深い人々によって独自の発展を遂げた竹原の文芸の実態を知るための一級資料といわれながら、広島県史などの編纂に際してその一部が利用されたほかはほとんど知られることのなかった吉井家資料の全容解明が長くのぞまれてきた。平成 17 年度に、広島県立文書館に吉井家資料の一部が寄託されたことにより、それが可能になったことから、本研究に着手した。

本グループでは、10 年近くにわたって広島県内に伝わる書物の調査を続けてきている。その実績を踏まえ、成果と照らし合わせることにより、江戸時代における芸南地域の文芸活動の実態把握と独自性が解明できれば、文芸資料を用いた地域活性化への寄与が可能になると考えるところである。とりわけ吉井家資料は元禄のころからの資料が相当量伝わっており、これまでに調査、研究を実施した広島県内の資料群に比べて古いものが多い。幸い、19 年度でおおむね資料の調査が終了したことから、研究に着手するための基本的環境が整った。

西方寺境内から竹原下市地区をのぞむ

その貴重性を重視し、近年進展がめざましい全国レベルの近世地域文化研究との関連について研究を深めるべく、関連資料の収集にも力を注いだ。

19 年度に調査を行った詠草類を中心とする資料には吉井豊庸､道工彦文とその周辺人物の作が多く認められた。２年間にわたる書物と詠草類の調査により、竹原の人々の文芸活動ネットワークと和歌の学びの実態の一端、人的関係や地域的広がりの解明が可能になると考えている。

3　研究結果の概略

２か年にわたる調査によって資料の全体像の把握ができたため、最終年度の完成を目指した「吉井家文芸関係資料目録」（仮）の基礎稿はほぼできあがった。調査漏れ等を補いながら、20 年度内の完成を目標として作業を進めている。

以下に、19 年度の調査で明らかになった吉井家資料の特徴を略記する。

（１）謡曲関係資料

謡本と関係資料は慳貪７箱分におよぶ。県内他地域においては見いだすことができない貴重な資料も含まれている。

（２）詠草類と関連資料

吉井豊庸と道工彦文が京都の地下歌人、有賀長伯の門人であったことから、詠草類、歌集の類の草稿や教授資料などが見受けられる。他地域における長伯門人の研究あるいは長伯自身の伝記研究と照らし合わせることにより、後水尾、霊元院歌壇の和歌活動の地方への広がり、元禄文化のの隆盛の様相がうかがわれる。長伯門下の中心的存在であったことが知られるが、帰郷後も、親族や門人たちと詠作を交わし、折に触れて歌会を催して、都で学んだことを実作において活かしたものと推測される。竹原文芸の礎を築いた二人の歌人の事跡を知るための好資料群であり、近世和歌研究において見逃せない貴重な資料が含まれるが、延享年間には和歌を通じて公家たちとも交流があったと推測される。また、瀬戸内海沿岸域の歌人たちとの交流も窺われる。

（３）厳島との関わり

竹原は文化交流においても、その地理的特徴を活かした海上交通による交流が盛んであった。『厳島八景』の所蔵は早くから知られていたが、厳島歌壇および俳壇、風律など広島城下の俳壇との交渉を窺わせる資料が散見すること、霊元院歌壇の人々との関係から推して、『八景』の作成それ自体に竹原の人々が関与していた可能性がある。地域文化研究を進める上で、さらに検討を要する問題が明らかになった。

4　今後の事業遂行予定

本研究の成果については、本学地域連携センターの協力を得て、竹原市が市制 50 周年を迎える平成 20 年 11 月に竹原市内で公開講座を開催、成果の一部を地域に公開する予定である。

〔講座の概要〕

テーマ：竹原文化の伝統―歴史資料の保存と活用のために―

日　時：11 月 8 日・29 日、12 月 13 日午後

内　容：西村晃・荒木清二（広島県立文書館）、樹下文隆・西本（県立広島大学）による４講座、および石田雅春氏（広島大学文書館）の講演とパネルディスカッションで構成。